

昭和10年の亀城公園整備

新緑の時期を迎え、亀城公園の木々の緑も深まってきました。現在、市民の憩いの場であり、多くの観光客も訪れる亀城公園が、江戸時代のお城であったことは皆さんよくご存じかと思えます。では、お城から現在のような公園として整備されるまでに、どのような経過があったのでしょうか。その一端を昭和10（1935）年の公園整備を中心に見ていきたいと思います。

近代に入ると、城址は新治県庁・新治郡役所などとして利用されました。ただし、明治時代初期の段階で城の主要施設の多くが破却・改変され、本丸御殿の建物も明治17（1884）年の火事で東櫓とともに被害を被るなど、お城の遺構の多くは失われていました。大正2（1913）年になると、城址に木造洋風総2階建ての郡役所が新築されます。右側の写真は「常陸名勝」土浦旧城址新治郡役所」と題された絵葉書で、櫓門の背後に新築された郡役所が見えます。レンガ積みみの門を備えた近代的な建物です。絵葉書をみると櫓門の左手の堀は埋められ、土塁の高まりもほとんどみられません。この建物は新治郡役所が廃止されたのも新治郡自治会館として利用されましたが、昭和7（1932）年に現在の常陽銀行土浦支店の場所に移転され土浦公会堂となりました。

自治会館移転により空地となった城址には、土屋神社遷宮計画や招魂社建設の意見などが出されましたが、城址と自然とが調和した公園として整備されることとなり、昭和10年に池の整備、土塁や堀の復元などが行なわれました。「廃墟といった姿で放置され、野原のごとき殺風景」であった亀城公園は、湧水の掘削・池堤の改装・土塁の整理・樹木の増植などがおおよそ

終了して、「従来の面目を改新」されることとなったのです（『亀城公会報』第十号）。

その完成された亀城公園の姿を伝えるのが、左側の絵葉書（土浦名所）土浦亀城公園です。手前には菅浦が咲くひょうたん池、左手奥には忠魂碑と櫓門、右手には宿り木（クロマツ）の樹幹にエノキが着生がみえます。完工直前の新聞記事では、「従来公園も名ばかりであったものが断然面目を一新、水郷の都市にふさわしい水と緑の自慢公園が出現する」（『いはらき』新聞、昭和10年4月1日付）と伝えていきます。当時の景観整備が「水郷」という郷土にふさわしいものとして認識されていたことがわかります。

亀城公園の整備と同じ時期、川口川下流（現在のモール505附近）の美化も行われ、柳の木を植えるなどして風致を整えて、「水の公園」と呼称されました。この頃の土浦は、筑波山登山・水郷遊覧・霞ヶ浦海軍航空隊の見学などに訪れる人々にぎわいました。桜川堤の花見や煙火（花火）大会を利用して積極的な観光客誘致が図られた時期とも重なります。昭和10年には近代的な商店街である祇園町が完成、土浦駅前と同9年に建設されていた国道とを結ぶ亀城通りも同11年に開通し、駅前と亀城公園が結ばれることとなりました。近代的な都市としての装いを整えつつ、水郷という環境を生かした街づくりのなかに、亀城公園の整備も位置づけられます。

ご紹介した写真を6月下旬まで博物館付属展示館の土浦城東櫓で展示しています。この機会にゆっくりと公園散策を楽しまれてはいかがでしょうか。

土浦市立博物館（☎824・2928）



土浦名所「土浦亀城公園」



常陸名勝「土浦旧城址新治郡役所」